慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカルドオの地代論（三）
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.4 (1924. 4) ,p.501(37)- 516(52)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240401-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

益の爲めにせんとしたものである。從つて其說明も亦國民自由なのであつた。

Pollard, Henry VIII. 35. footnote.

註九、McKechnie, 118-119.

註一〇、Pollard, Henry VIII. 32-33.

註一一、Figgis, Divine Right of Kings. 228.

大正一三、三、一一

リカルドオの地代論（三）

小泉信三

十二

Ricardo が穀法論爭より受けたる刺戟は其の Malthus に與へたる書簡に其反映を示せり。一八一四年に入りて、此の二大經濟學者間の論爭は、通貨の外國爲替に對する影響なる「舊問題」より轉じて、穀物關稅の影響なる當面の問題に移り、而して他の幾多の場合に於けるが如く、此問題に就ても亦 Ricardo と Malthus とは其所見を殊にする所ありたり。論爭點は穀物關稅の結果たる食料品の騰貴の資本利潤に及ぼす影響に係れるなり。既に三月八日 Ricardo が其友 Hutches Trower に與へて自己と Malthus との見解の相違を報じたる書簡に由て觀れば、兩者は俱に資本と其用途との關係變動して、前者に對する後者の比例增大する時は利子騰貴し、其反對の事行はるる時は利子下落することを認むと雖も、Ricardo は資本に對する資本

用途の比較的增大は、食物生產の低廉となることを俟つて始め行はるべく、又一般利潤率は農業資本に對する利潤に由て左右せらるべきことを主張するに對して、Malthus はその必しも然らざることを爭ひたるなり。上記書簡の一節に謂はく、「……予は、農耕上の改良あるか、或は外國よりの穀物輸入の新に容易にせらるゝことあるにあらずんば、如何なる國に於ても新資本使用の舞臺(the arena for the employment of new capital) は資本其者と同一又はより大なる比例に於て增加すること能はざること、約言すれば、爾餘一切の業の利潤を左右するものは、農業家の利潤にして、而して農業家の利潤は苟も土地に投ぜらるゝ資本の增加するや、同時に農耕上に改良の行はるゝことなき限り、必然是と共に減少せざること能はざるを以て、一切爾餘の利潤は必ず減少し、從つて利子は下降せざること能はざることを主張するものなり」と。Malthus は此說に同意せず。「彼れは、資本使用の舞臺は、輸入、或は耕作改良に依る食料生產の爲めの新便宜なきも猶ほ增大すべく、從つて利潤及び利子は騰貴すべしと思惟し、又他の業の利潤が農業家の利潤を左右することは、敢て農業家の利潤が他の業の利潤を左右するに劣らず。從つて若し新市場にして發見せられ、斯る市場の發見前よりもより大なる外國貨物量を我國產の貨物に換えて獲得することを得んか、即ち利潤は騰貴すべく又利子も騰貴すべしと思惟するなり。斯る狀態の下に於ては、彼れの以爲へらく、「假令土地に投ぜらるゝ資本は增加するも、利率と利潤と並に騰貴すべしと」。Ricardo は食物の生產を低廉にするの外他に同額又は增額せる資本を以てして、永續的に利潤を騰貴せしむるの方法あることなしと謂ひ、Malthus は敢て此方法の利潤を騰貴せしむべきことを爭はずと雖も、資本の增加を以てして同じく利潤を騰貴せしむべき他の諸事情あることを主張したるなり。(Letters to Trower pp. 5-6)。

食物生產の難易の資本利潤に對する影響に關する Ricardo の所信は、Malthus との論爭應答を重ぬるに從つて愈々堅きを加へたり。六月二十六日の書簡に曰はく、「……予は穀物輸入に對する制限の結果の利率を下降せしめんとする傾あることに關する貴下の疑念を分つこと能はず。……經濟學上の命題にして、穀物輸入に對する制限は輸入國に於て利潤を下降せしむるの傾向ありと謂ふものよりも堅く予の確信せるものあることなし」と。又 Ricardo が覓むる處は、利潤の一時的變

動の原因にあらずして、其の永久的變動の原因なり。九月十六日の書簡に曰はく、「……資本が其用途に比較して稀少なる時は、その如何なる原因より生ずるを問はず、利潤は高かるべしと謂ふことに於て、予は貴下に同ず。その果して一時的に然るか、永久的に然るかは、原因の一時的なるか、永久的なるかに因らざるべからざること勿論なり。然れども甚だ肝要の事は、資本をして其用途に比較して稀少ならしむる原因の果して何たるかを確かめ、其上に於てその果して何の處まで一時的、若しくは永久的なりと認むべきやを確むること是なり。予が土地耕作の狀態の幾ど唯一の永久的大原因なることを信ずるに至れるは、此研究上に於ての事なり」。別の諸事情の一時的結果を伴ひ、又特殊の産業に部分的影響を與ふるものありと雖も、土地産物の、生産に必要なる資料との比較上に於ける其生産の狀態は、一切のものに作用し、又獨り其効果に於て永續的なり」と。

Ricardo は後に Malthus の行論の態度を評して、一般的原理を深く顧みずして、一時的原因結果に重きを置くこと過ぎたるの嫌ありと謂ひ、又後者の實際的偏見 (practical bias) を抱けるに反して、己れの細目を意に介せざる強き理論的偏見 (theoretical bias) を有することを認めたり (Letters to Malthus VIII)。此兩家態度の相違は、其利潤昇降論に於ても明かに現はる。Ricardo の次の書簡（十月二十三日附）は曰く「予の目に映ずる處に於ては、食物獲得の難易の資本利潤に及ぼす結果に關しては、吾等は甚だ大に意見を異にするものの如くならず。貴下は予の『土地産物の生産に必要なる資料との比較上に於ける其生産の狀態を以て、資本の利潤及び資本の有利なる使用方法を左右すべき幾ど唯一の原因となすものゝ如き』ことを謂へり。是予の說を正叙するものなり、……。貴下は食物獲得の便易が高利潤の幾ど唯一の原因たることを認めずして、その主要原因なりと謂ふも妨げず、又食物獲得の困難が低利潤の主要原因なりと謂ふも妨げずと爲すものなり。予を以て見れば、此等の說の間に存する相違は甚だ些少なり。貴下は推究して、予の學說は正しからず、如何となれば、農業又は工業上に改良の行はるるものあるべく、新借地契約は必しも宛も正に原産物の價格騰貴せる時に際して締結せられざるべく、勞働の價格は必しも直ちに同一比例を以て騰貴せざるべきを以てなりと謂へり。然れども必ず生産を容易にし、又は增進せしむべき農業上又は機械の改良は、予の主張に從へば、利潤

を增加せしむべし、如何となれば、『そは生產を、其生產に必要なる資料に比較して增進せしむべき』を以てなり。勞働賃銀の生產物價格と同一比例に於て騰貴せざることに就て謂ひ得べきことも亦同じ。本問題に關係ある舊借地契約に就いては、農業より擧げられたる利潤を計算するに方りては、借地契約を評價するに其の計算の時に於ける價値を以てすべく、前期に約定せる價値を以てすべからざることは貴下の認むる處なるべし。事の例へば一製造場又は釀造所の利潤に關する場合に於ては、假に釀造者中數人の、僥倖にして其大麥をその二割五步低價なりし時に購入したるものありとするも、吾人は當に此利潤を大麥の當時の價格に從つて計算すべきものたるなり。されば此等の諸點は明かに予の立言中に酌量せらるゝものにして、決して是と相杆格するものにあらず。貴下は貴下の叙述に附加して（食物獲得の容易又は困難より起る高利潤と低利潤との）兩極端の中間に重要なる變動起り得べく、また實際上如何なる國も、未だ曾て原產物の價格騰貴よりして若干期間土地に對する利潤の增加することを許さゞるが如き狀態にありたることなしと謂へり。予は變動の起るべきことを認む。生產物獲得の費用は必しも均一ならざるを以てなり。又費用にして均一なりとせば、生產物其者は價値を增すことあるべく、何れの場合に於ても利潤は變動すべし。然れども此等の一時的變動行はるゝ間に於ても、一方大原因、即ち資本の蓄積は、利潤の永久的減少の爲めに路を開くことをなすべし」と。

Ricardo は次いで、資本の蓄積が利潤の下落を來たすに至る徑路を述ぶ。曰く、「原產物の價格騰貴は、漸次の資本蓄積に依つて生ずべし。資本の蓄積は勞働に對する新需要を造り出すことに依りて人口に刺戟を與へ、延いて劣等地の耕作、又は改良を促進すべし。然れども此事は利潤を騰貴せしめずして、下降せしむべし。奈何となれば、啻に賃銀率騰貴するのみならず、雇傭せらるゝ勞働者增加して、是に比例する原產物收穫の生ずることなきを以てなり」と（pp. 46-8）。更に別の書簡の一節は曰く「……予は貴下をして商工業上に投ぜらるゝ資本の利潤は、生活必需品、又は勞働賃銀のそれに支出せらるゝ目的物の廉不廉以外、別の原因に依つて永久的に下落又は騰貴すること稀なるの理を承認せしめんことを努め來れり。資本の蓄積は利潤を下降せしめんとするの傾向を有す。何故ぞ、蓄積は必ず食物獲得の

困難增進を伴ふを以てなり。但し農業上に於ける改良の此に伴ふときは、此限りにあらず。此場合に於ては、そは利潤を減少せしむる傾なし。困難の增進なくば利潤は斷じて下降することなし。製造工業品の有利なる生產に對しては、賃銀の騰貴以外に何等の制限なきを以てなり。若し資本の蓄積に連れて、新なる肥沃の地を此島國に添加することを得ば、利潤は終に下降することなかるべし」と。(p. 52)

十三

斯の如くRicardoはMalthusに對して、穀物生產の難易、食料價格、從つて勞働賃銀の高下の、利潤の永續的減少、又は增加の「幾ど唯一の原因」と認むべきの理を主張して說明頗る努めたり。今彼れがMalthusに與へたる書簡の現に保存せらるるものの中、一八一四年六月二十六日附のものより翌年一月十三日附のものに至る八通、皆な此問題を論ず。而してRicardo・Malthusが右の第一の日附より前に既に此問題に就きて說を戰はせたることは、上記H. Trower宛て書簡に由て明かなる處なり。

今Ricardoは利潤率平均の傾向を認む。此は曾にAdam Smith以來經濟學理論構成の前提をなすのみならず、Ricardoが前記書簡の一節(三八頁參照)に農業家の利潤が爾餘一切の利潤を左右することを謂へるは、即ち此平均作用を認むるに由でたるものにして、農業利潤と爾餘產業の利潤との間に甚しき高低ある時は、資本は利潤率低き方面よりその高き方面に移動して、以てその少くも略ぼ平均することを致すべきことを謂ふものと解せざるべからず。既に農業と爾餘產業との間に利潤率平均の事ありとせば、同じく農業家の利潤の、その耕す土地の肥瘠如何を問はずして正に均一に歸すべきは論を俟たざる處ならん。然るに今資本蓄積は人口增加を刺戟し、人口の增加は劣等地の耕作を促し、劣等地の耕作、即ち食料生產の困難增進は、利潤を下落せしむることと上方記する所の如くにして、而して農業家の利潤はその肥沃地を耕すものゝ利潤と雖も此が爲めに均しく下落せざること能はずとせば、始めの利潤と新なる低き利潤との差額は果して何物を構成し、又何人の收得する所たるべきやの疑問を生ず。Ricardo答へて曰はく「……地代は常に資本利潤より取り去られたるものなり」(Letters to Malthus p. 59)と。知るべし。先づ利潤の下落に因つて生じたる罅隙に占據し、次いで利潤の更に下落すると共に益々其舊領域を蠶食するものは地代なることを。故に利潤の理法は單獨に之を說

きて完きこと能はず。利潤論は之を背面より説けば、即ち地代論なり。Ricardo の小冊子が「低廉なる穀價が資本利潤に及ぼす影響」を標題として、而かも其の最重要部分を占むるものが地代理論にして、著者の先づ筆を着くるところが亦た同じく地代理論なることも決して異しむに足らざるなり。既記の如く、Malthus の Inquiry into the Nature and Progress of Rent は一八一五年の始めに公にせられたり。Ricardo は「大なる注意を以て」之を讀み、二月六日其所感を著者に告げたる後「若し小閑を得ば、此問題に關する予の思想を筆にせんことを試みるべし」と言ひ、而して既に四日の後には、前記の如く、(本誌前號四九頁)過末 Malthus を訪問して、Influence of a Low Price of Corn etc. の原稿を示すべしと約束するに至れるなり。

Ricardo は重要の點に於て地代に關する Malthus が所説の合正の見なることを認む。前記二月六日附の書簡の一節に曰く、「書中の主要なる原理は皆な予の全然同意するところなりと謂ひ、又本書を以て啻に地代のみならず、例へば課税其他の如き、他の幾多の難點に關して重要なる幾多の獨創的見解を含めるを認むと謂ふは、敢て賞讃にあらざるなり」と。Ricardo は其小冊子の序文に於ても Malthus に敬意を表して、自家の地代理論が Malthus 所説のものと異なる所甚だ尠く (differ in a very slight degree) 又自ら Malthus の優秀なる著作に「負ふところ甚だ大」なりと謂へり。然れども茲に Ricardo が Malthus に負ふ所甚大なりと謂へるは、必しも Malthus に由つて始めて地代論を學びたりとの意義に解するの要なきものゝ如し。上に予は少しく Ricardo の利潤説は背後に其地代説を擁せずんば完きこと能はざるの理を示さんとしたり。而して其利潤論は Ricardo が其穀價影響論を公にするに至る迄殆ど一年間、Malthus の異見にも拘らず、堅く執つて動かざりし所のものたるなり。況や後段述ぶるが如く Ricardo の地代説は Malthus 所説とは重要の點に於て同じからざる所あり。且又 Ricardo の Malthus 著作を讀みてより其自家論文の稿を脱するに至るまで恐らく僅かに旬日を隔つるに過ぎざりしに於てをや。(Cannan の考證する處に據れば、Influence の出版せられたるは、二月二十五日附 Jacobs' Letters to Whitbread の上梓前なり。Theories p. 161 n.) 故に Hollander が、Ricardo の Malthus に負ふところありと云へるは、學説上の負債 (doctrinal obligation) ありと謂ふよりは、寧ろ後者の著作の先なることを認めしものならんと解する (Ricardo p. 76 n.) は恐らく至當の見解なるべし。後に(一八二八年) McCulloch が記して「彼 (Ricardo) が此等著作 (Malthus

及びWestの冊子)の最も先なるものゝ出版に先んずること數年にして、既に〔地代〕原則を懷抱し、談話中に之を説くことを常としたりしは、其の幾多の友人の善く知る所なり」と謂へる(ibid)ことも亦た其旁證となすに足るものなるべし。(但しRicardoがMalthus, Westの著作に先んじて既に其地代學説を抱懷したることは必しも、彼れを地代理論の先覺者たらしむるものにあらず。Malthusの小冊は其の自ら記す如く其の東印度學校に於ける講義草稿の一部を成し、Westの著作も亦其の「數年前(some years ago)予の頭に浮びたる經濟學上の一原理を公表」したるものなるを以てなり)。

十四

"Ricardoが謂ふ所の地代は「土地の本原内在の力(the original and inherent power of the land)の使用に對して、地主に與ふる報酬」の義なり。若し地主自ら其所有地に資本を投ずるか、或は借地期限の到來に際して前借地人の資本の其土地に殘留するものある時は、地主が收むるところのものは名は地代と稱せらるゝも、其一部分は實は資本に對する報酬たるものにして、此を控除せる殘額のみ眞に本原的地力の使用に對して支拂はれたるものたるなり。(Works of Ricardo p. 375 n.)。此意義に於ける地代は、Ricardoの解する所を以てすれば、土地生産物の價値總額より生産費を控除せる餘剩を以て成るものなり。即ち彼れはMalthusが「土地の地代は全生産物の價値の中、其種類の何たるを問はず、其耕作に屬する一切の支出——其當時慣行普通の農業資本利潤率に據りて算定せる投下資本の利潤を含む——を支拂ひたる後に、土地所有者に殘る部分と定義することを得べし」と謂へるを甚だ當を得たるものとなしたるなり。されば「農業資本の普通慣行の利潤率、及び土地耕作に屬する一切支出の合計が全生産額と相均しき場合には、何等の地代あることなく、又全生産額の價値が僅に耕作に必要なる支出に均しき場合には、地代も利潤もあることなき」は當然なり。(p. 371)

此理を明にせんが爲め、Ricardoは新國土に始めて植民の行はるゝ場合を假想す。肥沃なる土地豐富にして、何人も隨意に之を耕し得るが如き場合には、生産總額より耕作の爲めの總支出を控除せる殘額は、悉く利潤として資本家の手に歸すべし。例へば或人が斯る土地に投ずる資本は小麥二百クオタアに相當する價値ありて、

其一半は建物道具等の如き固定資本、一半は流動資本より成るものとし、而して固定流動兩資本を償ひたる後に、猶は殘る生産物の價値小麥二百クォタアに相當するものありとせば、資本所有者に對する純利潤は二百に對する百、即ち五割たるべし。而してRicardoに從へば斯の如くにして定まれる此利潤率は一切商工業に投せられたる資本の利潤を定む。蓋し、「若し商業に投せられたる資本の利潤にして五割以上ならんか、資本は土地より撤回せられて商業に投せらるべく、若し五割以下ならんか、資本は商業より農業に移さるべき」を以てなり。

然るに最初の植民地附近の沃地を悉く耕し盡したる後に於て猶ほ資本及び人口の增殖ある時は、位置不便なるか、或は地味劣れる土地を耕すことに依りて、食物需要の增進に應ずるの途に出でざるべからず。其の何れの途に出づるも、生産費（耕作費又は運搬費）は增加す。「假に此追加を小麥十クォタアの價値あるものとせば、前と同量の收益を得んが爲めに、新しき土地に投せらるべき全資本は二百十なるべく、從つて資本利潤は五割より四割三歩、即ち二百十に對する九十に下降すべし」。然るに利潤は農業と農業以外の産業との間に平均するのみならず。當然又同じ農業資本の間に於て平均す。茲に於て始め優等地の耕作より生じたる利潤は、分割せられて、利潤と利潤ならざるものとの二とならざるべからず。乃ち曰く「始め耕されたる土地に於ては、收穫は前と同一、即ち五割又は小麥百クォタアたるべし。然れども資本の一般利潤は農業に對する資本の投下中その最も有利ならざるものより生ずる利潤に依て左右せらるゝを以て、百クォタアの分割行はれて、四割三歩即ち八十六クォタアは資本利潤をなし、七歩又は十四クォタアは地代を成すべし。而して小麥二百十クォタアの價値ある資本の所有者は、遠隔の地を耕すも、將た最初の移住者に地代として十四クォタアを納付するも、その收むる利潤の正に同額なるべきことを思へば、斯る分割の行はれざるべからざることは明白なり」と。此場合農業以外に投せられたる資本の利潤が亦同じく四割三歩なるべきは前述の理に由て明なるべし。

人口及び資本益々增殖して、位置又は地味の更に一層劣等なる土地耕さるゝ場合に、利潤の更に下降し、地代の更に騰貴すべきは別に説明を俟たざるところならん。故に曰く「されば地味劣れるか、位置比較的不便なる土地に逐次耕作を及ぼす

ことに依りて地代は、前に耕されたる土地に生ずべく、且つ利潤が下落すると正に同一の程度に於て爾かすべし。而して利潤の尠少が蓄積を抑制せざる限り、地代の騰貴と利潤の下落に對しては幾ど何等の制限なし」と。（p. 373）

新に地味劣れる、若しくは位置不便なる土地に耕耘を及ぼすことなく、たゞ既耕の地に收穫率の遞減を顧みずして更に累ねて資本を投下する場合に於ても亦た同じく利潤は下降して地代は發生又は騰貴す。「若し遠隔の新地に資本を投ずることをなさずして、小麥二百十クオタアの價値ある追加資本が既耕の第一地に投ぜられ、而して其收穫は同樣に四割五分、即ち二百十に對する九十なりしとせば、最初の資本に對する五割の收穫は、前と同樣に分割せらるべし――即ち四割三歩若しくは八十六クオタアは利潤を成し、十四クオタアは地代を成すべきなり」。（未完）

直接配給の原理と其限度（中）

（社會的勞働組織としての配給組織其三）

向井鹿松

九

本誌前々號に於て余は配給組織に於ける資本の意義を論じて次のやうな結論に到達した。則ち「現代資本主義社會に於ける商業資本は生産資本の延長及び變形である。商業資本なくして資本主義的生産は行はれない。而も此に要する商業資本の高は莫大の額に達する、從つて其危險も亦甚だしく大なるものである。而して此資本の高と危險は生産者一人の負擔としては餘りに大である。是れ則ち直系配給組織の存在の一理由をなすものである。故に若しかかる莫大の資本を處分することが出來、又危險を負擔し得るものは企業的意義に於ける直接配給